

### 1 自己評価及び第三者評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2874001817		
法人名	さくらケアサービス株式会社		
事業所名	グループホームさくら野里		
所在地	姫路市野里434番地の1		
自己評価作成日	令和3年11月9日	評価結果市町村受理日	令和4年1月24日

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

さくら野里は住み慣れた地域で自分らしく最期まで…ということを大切にしており施設看護師、協力医療機関と協同し看取りケアに力を入れています。末期がんの方や老衰で亡くられる方など様々にいらっしやいます。重度化していく方が多くケアには時間がかかってしまいますが、食事は家庭料理を手作りしています。いりこだしの香りや料理の音などで家の雰囲気を感じていただけるようにしています。セラピストにアセスメントやリハビリのアドバイス・リスクマネジメントをしていただきながらリハビリや歩行等を続けることで機能維持や改善に繋がっています。コロナ禍で外出が出来なくなったため、カラオケ大会やテイクアウトの食事を楽しむことで室内で出来る気分転換を行いました。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 [https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/28/index.php?action=kouhyou\\_detail\\_022\\_kani=true&JigyosyoCd=2874001817-00&ServiceCd=320&Type=search](https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/28/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JigyosyoCd=2874001817-00&ServiceCd=320&Type=search)

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 はりま総合福祉評価センター		
所在地	姫路市安田三丁目1番地 姫路市総合福祉会館内		
訪問調査日	令和3年11月30日		

開設から20年をまもなく迎えるグループホームさくら野里は、「住み慣れた地域で自分らしく暮らす」ことを大切にしながら、利用者の重度化や看取り介護の実践を重ねている。また、開設当初から食事を事業所内で手作りするを大切に、職員が利用者の持てる力を活かしながら盛り付けや配膳、食器洗いなどを行っている。新型コロナウイルス感染症の影響から、地域の方を招いた「オレンジ喫茶(認知症サロン)」の取り組みや外食、買い物といった社会との繋がりをもち機会が減る一方、事業所内でカラオケやリハビリ体操の実施、ピザやお弁当をテイクアウトするなど、今できる支援を事業所全体で考えながら質の高いケアが行われている事業所である。

#### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を 掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求め ていることをよく聴いており、信頼関係ができてい る (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面が ある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域 の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係 者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理 解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表 情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足 していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく 過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおお むね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な 支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および第三者評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を玄関に掲示している。以前は朝礼で読み上げていたが、新型コロナウイルス感染症の予防のため現在は読み上げてはしていないが管理者・職員は理念をもとにケアを行えるように努力している。	法人理念および事業所独自の理念を、玄関・事務所に掲示している。新型コロナウイルス感染症の流行以降は、毎朝の唱和を中止しているが、理念が日々の実践につながるよう意識しながら、毎日のケアに努めている。	理念が実践に繋がっていることを可視化することにより、理念の達成度を確認する機会を設けるなど、理念の実現に向けた取り組みを期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	この2年間は、外出や近隣の行事もなく地域とのつながりはあるが、日常的には交流は持っていない。	コロナ禍以前は、事業所内で認知症カフェを開いたり、地域の祭りに参加したり、地域で行われている認知症高齢者声掛け模擬訓練に参加するなど、地域との親密な関係性が構築されていた。様々な行事が中止になった現在でも、地域の自治会の計らいで、利用者のために散歩コースの花壇を整えてくださるなど、地域とのつながりは途切れていない。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	開かれた場所となるように認知症カフェも行っていたが、近年ではカフェは休止状態となっている。時折、近隣の方からのご相談の電話などがありその際には支援出来ているように感じる。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は実施できていない。感染対策をしっかり行い、皆様が安心して開催できるように検討していきたい。	新型コロナウイルス感染症の影響により、現在運営推進会議は実施していない。運営推進会議の構成員である地域包括支援センターから研修の情報提供をもらうなど、個別のやりとりはあるが、一堂に会して開催する会議は実施が困難な状況である。	多人数での会議が困難であっても、書面や情報通信技術などを活用して、情報を外部に発信し、様々な立場からの意見を聴取することにより、双方向からのやり取りができる仕組みづくりを期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	校区内の地域包括支援センターの方との連絡を密にしており、相談や報告を行っている。	地域包括支援センターとは密に連絡を取り合っており、オンライン研修の案内や様々な情報提供を得られるほか、何かあれば気軽に相談できる関係性となっている。介護保険課とは、待機者情報の報告や加算、認定区分の変更等についての問い合わせなどで連絡することが多い。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の定義について常に振り返り研修を行っている。玄関からフロアに近いこともあり不審者の侵入防止の観点から玄関を開錠してはしない。ただ、外出希望のある方には常に対応している。	身体拘束と虐待・不適切ケアについて、年に3回研修を実施しているほか、職員会議でも振り返りを行っている。玄関は施錠しているが、家に帰りたくないと訴えられる方には、納得していただけるよう自宅近くまで毎回お連れしている。身体拘束等の適正化のための指針が整備され、対象者がいる場合は、適正な方法で実施している。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待に関する知識向上と振り返りの観点から、施設内で研修を行い虐待が見過ごされることのないように職員同士が互いに注意を払い、防止に努めている。	職員同士で情報をこまめにやり取りし、虐待や不適切ケアに繋がらないよう意識づけしている。ストレスが虐待に繋がらないようにするため、職員の希望に沿って休みがとれる勤務体制にすることやリフレッシュ休暇も設けている。また、年1回は職員面談を必ず実施している。		
8	(7)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護についても研修を行い、成年後見制度などについては支援につなげている。	毎年、地域包括支援センターによる成年後見制度についての研修を実施していたが、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり実施できていない。パンフレットは各フロア玄関に設置している。現在、成年後見制度を活用する利用者が1人おられ、過去には事業所からの紹介で制度利用につながったケースもある。		
9	(8)	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結・解約、改定の際は丁寧に説明し、利用者や家族などに理解と納得をいただいてから進めている。	契約の際には、契約書以外にも「入居のご案内」という書面を用いている。かかりつけ医、緊急時の対応、延命治療等、質問が多い事項や、入所時に相互の意思について重点的に確認すべき内容をわかりやすくまとめ、説明している。入居時の費用について計算書を渡すこともある。ケアの内容や季節ごとの行事などは、事業所が発行している新聞やホームページを利用して紹介している。		
10	(9)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見や要望は常に受け付けており、反映できるように意見要望書を作成し職員全体で共有している。	日常的なやり取りの中で、意見や要望を聞くことが多いが、コロナ禍の面会制限等で、以前と比べると直接的な意見をやり取りする機会は少なくなった。過去には、意見要望書としてアンケートをとっていた。家族から意見や要望があれば、その都度対応し、清掃方法や職員との連絡方法について改善した事例を確認した。		
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	フロアでの会議や個別面談を実施し意見や提案を聞く機会を設けている。管理者はその意見や提案を代表者に伝えている。	月1回開催するユニットごとの会議や、年1回行う個人面談で、意見を聴取している。職員の意見により、リクライニングシャワーキャリーの導入や機械浴ができる特殊浴槽へのリフォーム、3モーターベッドへの転換などが行われている。法人全体が参加する月1回の会議や職員の親睦会では、法人代表にも気軽に意見を伝えることができる関係が構築されている。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	各自で目標を持ち仕事をしてもらっている。スキルアップにつながるよう、内部や外部の研修に参加してもらったり、勤務時間や日数調整・福利厚生にも力を入れており人間ドックの費用補助や介護福祉士・介護支援専門員の資格取得のための補助も行っている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の研修や資格取得に向けての支援を個々に合わせて行っている。介護技術については業務内で先輩職員が丁寧に指導し新人職員の技術向上に努めている。			

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域で開かれている研修会に参加して同業者との交流を図っていたが、コロナ禍でできにくくある。オンラインでの研修会などでの交流を行いサービスの質の向上につなげる取り組みをしている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人様との会話を大切にしその中からアセスメントし、生活歴や習慣、ニーズなどを把握できるように努めている。じっくりと本人の話を聞いていくことで信頼関係を築けるよう努力している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人様と同様に丁寧に聞き取りを行い、家族様の思いも大切にできるように関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	初期相談や入居時には、グループホームへの入居という支援だけを考えるのではなく本当に必要とされている支援が出来るように対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人が得意とすることを探し、家事や園芸などに参加していただいている。例えば、掃除や食器洗い・野菜づくりなどをさせていただくことで職員の負担も軽減され感謝の気持ちを伝えることで本人もやりがいを感じられる。自分の役割を持っていただくことで支えあう関係が出来ている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	リハビリを手伝ってもらったり、インシュリン注射を家族様にさせていただいている。家族と共に本人の生活を支えられるように日々検討し、対応している。		
20	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍ではあるが出来る限り本人の大切にしてくられた人や場所などの関係が途切れないように支援してる。	家に帰りたい思いが強い方は、本人が納得されるまで週2～3回、自宅までお連れするケースもある。コロナ禍により、直接の面会は制限をしていたが、通信機器によるリモート面会は行った。携帯電話を持っていない方へ、電話をかける支援も行っている。	

自己 者 第	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21	○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の方が食事介助や声掛けをされるような時もあり、またリハビリ体操などで一緒に汗を流し励ましあいながら運動を続けられるような環境作りをしている。		
22	○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスの利用に関係なく困られたときは相談を受けられるような体制づくりをしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>				
23 (12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	意向は本人に直接尋ねても認知症の進行に伴い希望や意向がなかなか出てこない方も多し。そのような場合は本人の生活などを見てニーズの把握をして意向や希望は思いをくみ取れるよう努力している。	日頃の生活を観察し、表情やしぐさ、生活歴を総合的に見て、思いや意向の把握に努めている。利用者の意思が表出できない内容は、家族から聞き取りしている。利用者ごとの個別ファイルの裏に、ご本人の好きなこと、行きたい場所、やりたいこと等が書き込まれており、職員間で共有もできている。	
24	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に利用のあった居宅のケアマネージャーなどからの情報提供や本人・家族の話などから生活歴や大切にされていた習慣などを聞き取り、職員間で共有して馴染みの暮らしに近づけるようにしている。		
25	○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一日の過ごし方も聞き取りや情報収集に努めている。環境の変化も認知症の進行に大きくかかわってくるため出来るだけ環境が家などに近づけるように家族とも協力し一日の過ごし方を考えている。		
26 (13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族はもちろんのこと、筋力維持や美味しく食事をしていただく工夫などセラピストなどの意見も取り入れながら介護計画の作成をしている。	月1回、モニタリング及びサービス担当者会議を実施し、3か月に1回は介護計画の見直しが行われている。事業所の職員その他、医師・看護師、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士などの専門的な指示や助言をうけ、介護計画に反映させている。	
27	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日のケース記録や日誌、特変事項などを記録し、ケアについても、自立支援につながるようなケアにつながるよう職員も意見を出し合い・情報共有・モニタリングしながら計画の見直しにつなげている。		

自己 番号	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	固縮などのある方についてはマッサージを利用していただいたり、食事が摂りにくなられた方には、嗜好品と一緒に買い物に行ったりしている。		
29	○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在は、地域の方とのかかわりを持つ時間がへり、地域資源の活用は思うようにはできていない。例年であれば、秋祭りや地域のイベント・公園などを利用し楽しんでいただいていた。ワクチン接種後には、徐々に散歩やドライブで楽しんでいただいている。		
30 (14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	希望に沿って受診していただくようにしており、主治医との信頼関係を大切にしている。また、遠方などでご家族が受診できないような時は家族に代わって受診の付き添いをしている。	契約時に、かかりつけ医は入居前の主治医と協力医が選べることを伝えている。基本的に、協力医でない場合は、家族による通院をお願いしているが、必要に応じて受診の支援は行っている。内科は月2回、歯科は毎週、心療内科は4週に1回の往診がある。眼科・皮膚科医の往診もあり、多様な受診先・往診先を確保している。また、看護師の配置があり、適切な受診先を判断できている。	
31	○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	情報共有の大切さを介護職員は理解しており、細かな変化も逃さないように医療職の方々に伝えている。また、伝わりにくいような入居者の変化にはiPadやデジカメなどで撮影したものを見ていただきより分かりやすく伝わるようにしている。		
32 (15)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病状により違いはあるが、3～7日程で一度病院関係者又は家族と連絡を取り容態の確認をしている。施設でも対応できる範囲の所まで回復されているような場合は早急に病院と協議し退院出来るよう環境を整えている。	早期退院に対応できるように、理学療法士等による事業所内でのリハビリを積極的に行っている。退院前のカンファレンスには必ず参加していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、最近は病院とのやり取りは主に電話で行うようになっている。看護師の配置もあり、病院とのやり取りは円滑に行うことができている。	
33 (16)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時の契約時に重度化した場合や終末期の取り組みについて本人・家族に説明し、出来る限り住み慣れた場所での生活を大切にしている。事業所出来ないこともあるため、そのような時は本人・家族や関係者とよく話し合い支援できるようにしている。	重度化に伴い、多数の看取りの事例がある。契約時に、看取りについて、事業所として対応できる範囲を説明し、実際に看取りの時期になった際にも、再度書類を用いて説明している。終末期と診断された場合でも、長期間看取り対応をする場合もあるため、看取り介護計画は3か月に1回程度の見直しの方もおられるが、状況に応じて随時変更している。	
34	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	利用者の急変時や事故発生時の対応ができるようにマニュアルを作成したり研修会を行ったりしている。急変時には看護師や管理者に連絡をし相談したり、指示をもらえるような環境を作っている。		

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練や災害対策についての訓練を定期的実施しており、避難方法を職員は理解している。地域の方々にも連絡網を共有し災害時に備えている。	ハザードマップが事業所内に掲示しており、災害時の避難確保計画を作成している。また、自治会との連絡網があり、避難訓練の際には、地元の消防団も参加している。備蓄は3日分の水や食料を備蓄されている。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個々に合わせた声掛けを行い、自尊心や羞恥心への配慮をしている。本人の思いを職員は共有しており、それに沿った声掛け支援を行うように日頃より心掛けている。	各居室にトイレがあり、排泄の際のプライバシーの尊重に寄与している。居室内に見守りのためのカメラを設置しているが、入居時に、家族・本人の同意がなければ、利用しない取り決めとなっている。プライバシーを尊重しないような不適切な声掛けや対応がないよう、接遇研修も行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	得意分野を生かし役割を持っていただき生活していただいている。生活歴や入居されてからの生活・性格などをもとに思いや希望を表出することが困難になられた方でも出来る限り自己決定できる環境作りをしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人のペースで過ごしていただくようにしている。ゆっくりとお部屋で過ごしたい方や毎日の日課をこなしたい方もおられるがご本人の希望に沿った支援ができるようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	整容や衣類選びなどをご自身で出来る方には選べる環境を作り、ご自身で出来ない方は職員が手伝うことでその人らしい身だしなみやおしゃれ出来るように支援している。		
40	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	最期まで食べる楽しみを大切に、ご自身で食事を食べられるような形態や方法を考えている。食事の介助が必要な方々でも食事が楽しめるような声かけを行いながら介助をしている。食事の準備や後片付けの際も利用者の方と一緒に安全を確保しながら行っている。	各ユニットの中心ある、広々としたキッチンで調理から下膳に至る行為を利用者とともに職員と一緒にしている。コロナ禍では、利用者と共に買い物に行くことは出来ない状況となっている。重度化により経口摂取が困難な方に対しても、刻んだり、潰したりしながら利用者自ら食事を食べられるよう工夫している。その他、ピザやお弁当をテイクアウトするなど、食事が楽しめるよう取り組んでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養のバランスを考えた食事作りを行いメニューを考えている。糖尿病の方には出来るだけ低糖質の食事を提供できるように考えて献立を作って対応している。水分摂取が困難になってきておられる方には、栄養補給にも繋がるようなお茶ゼリーや飲みやすい物を提供し一日1300～1500ccを目標にとっている。		

自己 番号	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアの大切さを職員もよく理解しておりここに合わせた形での口腔ケアの支援を行っている。ご自身で行うことが難しい方も口を本人に開けてもらい口腔ケアをしている。		
43 (20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレでの排泄パターンをつかみ本人の意思・希望に沿ってトイレ誘導を行っている。一人でトイレに行けない方も職員の介助によりトイレに座っていただくことでトイレでの排泄につながる方も多い。	各利用者の居室にはトイレが備わっており、起床時や食後や就寝前にトイレ誘導を行っている。ご本人の普段の様子を観察し、トイレに行きたい様子や気配を察して、随時トイレの声かけを行っている。入居前や入院中は紙パンツや紙オシメを使用されていた方も、利用者にあつた適切な排泄支援の方法を検討し、安易にオムツを使用しない支援が行われている。	
44	○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘から体調を崩される方も少なくないため、排便状況を確認しここに応じてお腹を温めたり、オリーブオイルを飲んでいただいたり工夫して便秘の予防・解消に努めている。		
45 (21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそつた支援をしている	入浴は出来る限り本人の希望に沿うようにしているが、職員の配置状況もあり事故等も危惧されることから時間帯は決めている。季節に合わせてゆず湯などで楽しんでいただくようにしている。	利用者の重度化に伴い、8月にはリクライニングシャワーキャリーの導入が実現している。入浴は水曜日と日曜日以外の14時～16時となっており、最低でも週2～3日は入って頂けるよう、拒否のある方にも声かけやシャワー浴での対応している。各ユニットへの機械浴の導入も行われている。ゆず湯などの季節湯のほか、冬季には入浴剤を用いるなど、入浴を楽しむことができるよう支援している。	
46	○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼夜逆転傾向に陥らないように配慮しつつ、日中の休息の時間も本人の状態に合わせて対応している。夜間の室温や室内環境にも配慮している。		
47	○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服薬の変更や薬の種類については必ず、お薬名や効能などを申し送りし副作用や状態の変化にいち早く気が付けるように努めている。処方箋もすぐに確認できる所においている。		
48	○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	役割を持って生活が出来るように生活歴などを細かく聞き取りし、家事が得意な方は家事のお手伝いを、畑の作業が得意な方は野菜作りをしていただき役割を持って楽しみながら生活していただけるよう支援している。		



自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	出かけたい希望のある方には、出来る限り希望に沿って外出している。畑や花壇の手入れ、ベランダでの日光浴など本人の希望に沿って外出支援をおこなっている。コロナ禍では、買い物などはなかなかいけないことがあったがドライブや公園などで人との接触の少ないところに出かけた。	新型コロナウイルス感染症の流行から、ドライブや外食、買い物と行った外出の機会が減っている。現在は、広々としたベランダに出て、家庭菜園や玄関庭先に植えられたジャガイモの栽培など、外気に触れる身近な取り組みを行っている。また、市内の霊園にある公園に向いて、テイクアウトしたアイスクリームや和菓子などを食べに出かける機会を少しずつ増やしている。地域の方の計らいもあり、散歩コースの花壇に花を見に行く機会も徐々に増えている。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を持っていることで不安な思いを解消できる方もおられたりするのでそのような方には現金をお持ちいただいている。好きなものを自分で買いたいと希望される方については持っていて買いたい物の支援を行っている。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙・年賀状や電話などは本人の希望に沿った支援を行うようにしている。本人・家族・友人などが顔を見て話ができるようにビデオ通話を活用している。			
52	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間では季節の花を生けたり、飾ったりしている。室温管理も徹底している。以前からあったナースコールの音が不快に思われる方もあったが、現在は音楽に代わっている。職員が出す生活音にも気を付けながら食事作りなどは行っている。	玄関は3階とも和風の格子戸となっており、玄関正面にある小窓からリビングの様子が伺える。共有空間は、折り紙や切り絵、外出時の写真などが飾られている。回廊に沿って多くの腰掛ベンチがあり、玄関脇には、談話できるコーナーも設けられている。広いベランダには自由に出ることで、プランターで花を育てられている。中央にあるキッチンから、美味しそうな臭いを感じられる空間となっている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	駐車場には畑があり、ベランダには花壇を設けている。園芸がお好きな方は野菜を植えて育てたり、花が好きの方は水やりをしたりして楽しみを持ち生活していただいている。また、居室前のベンチやコーナーにある喫茶スペースにて自由に過ごしていただいている。			
54	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家具などは居室内に本人の使い慣れたものを持ち込んでもらい居心地よく過ごしていただける環境作りをしている。	畳の居室とフローリングの居室がある。職員が手作りした木製の表札があり、窓には障子が設置されている和風の居室となっている。また、各部屋に車いすが入るトイレと洗面台が設置されている。馴染みの家具や写真を持ち込まれ、飾られており、テレビやオーディオを持ち込まれている方もおられる。居室のレイアウトを家族と相談したり、利用者が思い思いの過ごし方ができるよう支援している。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	毎月の理学療法士によるアセスメントから安全に自立した生活が送れるような家具の配置方法や移動時の注意点・筋力アップの方法などを教えてもらい支援に活かしている。その為、移動や排泄動作などでも自分で出来ることが増え自立した生活支援へと繋がっている。			